

ボランテニア精神の源を訪ねて……③
海事関係者からの奉納物

海洋国日本で、古くから受け継がれてきた水難救助の精神。
ここでは、日本における水難救済の歴史を、
さまざまな角度から検証してまいります。

◆はじめに◆

十辺舎一九の『続膝栗毛』には、金刀比羅宮の特徴的な奉納物として「髻の絵馬」が紹介されています。これは毛髪を束ねた「髻」を木額に括り付けた物で、境内の至る所で見かけられたと記されています。

さてこの「髻」ですが、同時代の随筆集『塩尻』に「海上で遭難した時に金毘羅大権現の名を唱え、毛髪を切ったり、あるいは持ち物を海中に投ずれば難をまぬかれる」と記されています。おそらく船中、危機に瀕した方々が、窮地を脱した御礼に自らの毛髪を奉納したのだと思われます。ただ、残念な事に「髻の絵馬」は現存しません。毛髪が傷みやすぐ脆いためです。とはいえ「髻の絵馬」は、当時の金毘羅信仰を知る上で非常に重要な奉納物です。

◆奉納物の歴史◆

金刀比羅宮に伝わる諸史料・諸記録は、幕末から昭和初年にかけて整理調査が行われ「金刀比羅宮史料」としてまとめられました。これは90巻に及ぶ膨

大なもので、奉納物関連の史料も収められています。本稿では同史料をもとに江戸時代の奉納物、特に海にまつわる奉納物について紹介します。

◆石灯籠◆

海事関係者による奉納物の初見は、正徳5年(1715)です。塩飽(しわく)牛島の船頭丸尾家によって石灯籠が奉納されました。塩飽諸島は瀬戸内の海運の要衝で、寛文12年(1672)に西回り航路が開かれると、その運航を一手に担いました。

一説に、こんびらさんが“海の神さま”として広く認知されるようになったのは、塩飽の廻船が金毘羅大権現の旗を掲げて諸国を巡ったことに由来するといわれています。

石灯籠の奉納は、宝暦7(1757)、越前敦賀(福井県敦賀市)の綱干屋仁兵衛、宝暦11年(1761)、大阪の小堀屋庄左衛門と続き、幕末の文久2(1862)尾張中須村(愛知県知多半島南端)の天野六左衛門に至るまで十数回続きます。



越前敦賀講奉納の燈籠(1) (左から2番目)



越前敦賀講奉納の燈籠(2) (正面から撮影)



「捕鯨図」絵馬。銜がうなり飛ぶ音、勢子のときの声、鯨の咆哮が聞こえるかのような大迫力

◆絵馬◆

前Vol.102 No.1号にて「海難絵馬」を紹介しましたが、海事関係者からの絵馬の奉納もあります。享保9年(1724)、



越前敦賀講奉納の燈籠(3) (竿の右面より。「越前敦賀講中講本綱干屋仁兵衛」と刻まれている)

同じく塩飽丸尾家から「鯛釣り戎」の絵馬が奉納されました。四代目五左エ門正次の時です。また讃岐多度津(香川県多度津町)廻船組合からは「翁図」の絵馬



越前敦賀講奉納の燈籠(4) (竿の左面より)

が、寛政4年(1792)には筑前(福岡県西部)の円通丸千蔵、栄久丸米蔵等による「禰海神図」(英一圭筆)の絵馬の奉納がありました。安政2年(1855)には土佐津呂(高知県清水市)の鯨方から「捕鯨図」の絵馬が奉納されました。

【次号に続きます】

◆執筆者◆



金刀比羅宮禰宜

琴陵 泰裕氏